



- 1 テクノクラート
- 2 判決が出ました。死刑です！死刑です！！
- 3 バタフライエフェクト ポエム
- 4 鳴り止まぬ潮騒
- 5 ピラミッドの落書き
- 6 二十五歳のお盆
- 7 綺麗に観察
- 8 隊列葬列
- 9 知らずに済んだフクシマ
- 10 民は広場へ
- 11 何才からでも研修中
- 12 糖分当分ゼロ。
- 13 猫背道
- 14 忘れても、忘れても、忘れられない日
- 15 Morning Moment
- 16 アンドロメダに向かってハンドキック
- 17 つまり、月夜に追憶27
- 18 走りゆく鏡
- 19 黒い 黒い 果てしなさ
- 20 時間を捨てる！
- 21 マナー、人生と世界における虚無感に対して
- 22 神々しき太陽の重力 痛々しき月夜の浮力
- 23 アンインストール オール オーバー パレスチナ&イスラエル
- 24 いずれ 燃え アルケー
- 25 69回目の夏におけるベルリンの壁のような隔たり
- 26 世代、時代、あっそう。
- 27 いいねって思わないけど「いいね」
- 28 支持率が
- 29 届かないとしても、響かないとしても
- 30 いらぬものだらけの中で

- 31 3本の矢を放ちました。
- 32 ただダダ2015
- 33 車窓と街並から零れ溢れる綺麗
- 34 333兆光年の螺旋に抱かれて
- 35 あれはそれはこれはそうだろ
- 36 死を想い書き巡らす詩
- 37 昨日のネガ 明日のポジ 今日のネジ
- 38 かかってこい、桜がすべて散ろうと。
- 39 自主規制グラデーション自己保身



感覚器官償却完了

了解

復活折衝までには概算の直しを頼む AM2:00を目安ということで

今日も流れていく

体系的な文書が

中枢を

電子とかネットワークとかなかった頃から続く伝統的な疾駆

少しかじる

仮想体験で息巻こうとする

物理的に単独でこなすべき量ではないことを
その能力を取得できていないことを 始めずとも知る

繰り返されていくミス
積み上げられていく毒
構造的に腐敗した帰結
知った顔した顔が顔も出さずに愚痴る
知った顔した顔が知ったというほどの調査もせずに愚痴る

どれだけの
教養と努力と犠牲と教育と経済と家庭と社会と時代が複合してここまできたの？
もっと知りたい
もっと知る必要がある
もっと知らせる必要がある
その真っ当の極致のような中枢で蠢く規格外の秘訣

出前の注文完了

了解

概算の直しが終わり次第、国会答弁の直し頼む

AM4:00を目安に出来る限りで

判決が出ました。死刑です！死刑です！！



レポーターは叫んだ。
僕は何だか悲しくなった。
その絶叫振りに。世の中全体の安堵の 見えないため息に。

初めてその事件を知ったのは数年前。
彼女は5人殺った。
盛大にやった。
性差は無縁だった。
5人殺った。
堂々とやった。
週刊誌は書きたてた。
「連続殺人美少女の素顔」
「美少女」という形容がはびこった。
なんら違和感はなかった。
彼女はとうに成人を迎えていたが、かなりの童顔だったから。
僕と同年といっても、誰も疑わないくらいの。

彼女はちょっとしたヒロインになった。
週刊誌は売れた。ネットオークションで写真は高値で取引された。
堅物コメンテーターも触れずにいられないほどのルックスの良さ。
まことしやかに広がる隠れた経歴の華麗さ。
バランスをとるように、道徳的側面からの中傷も過熱していった。

僕は夢中だった。
彼女はアイドルに等しかった。
そう、青春の1ページに色濃く飛び込んできた。
おそらく、僕と同年代のみんなが彼女に惹かれていた。程度の差はあれ。
1ヶ月くらいは学校でも彼女の話題で持ちきりだった。

そんな彼女に判決が下った。
そうそうたる弁護団に囲まれながら。
根強い草の根ファン達に囲まれながら。
12年の歳月が経っていた。

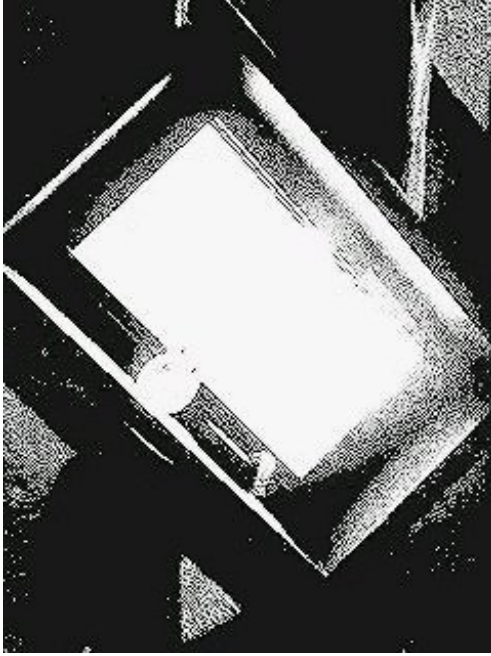
彼女は美しかった。
作品を慎重に見極め、確実にコンスタントに成功に導く。
トップ女優と並んでも引けをとらないくらい。

彼女はたくましかった。
海外の展覧会で火がつき、津々浦々でワークショップを通じて伝播していく。
国際的映像作家と並んでも引けをとらないくらい。

みんなわかっていた。
弁護側も検察側も。ファンもアンチも。
でも、世の中全体がどこかで別の答えを期待している節もあった。

彼女は死んだ。

「終身刑」という制度が導入に至る大きな口火として。



生まれ変わりたい
何度願ってきたことだろう

見つめることをなおざりにして
そうこうしているうちに現実にはモノクロとセピアに呑み込まれていって

どうしようもない現在進行形へと変貌
どうかしようもしない現在退行形へと変造

想像性を現実に当てはめず 二の足ばかり研ぎ澄まし

創造性を現実に当てはめず 浮き足ばかり研ぎ澄まし

それでも この瞬間もどこかで決定的に連関している
まったくの孤独のワンルームの独り言であろうとも

たとえば 僕が今こうして
部屋でこの詩を綴って 路上で詩の朗読を始めるとする

その姿を見て誰か独りでも
あんなのでも詩として発表していいんだ
あんな程度でも路上で朗読していいんだ

そう思ってくれないとは限らないでしょ？
絶対にあり得ないとは言いきれないでしょ？ 0%とは限らないでしょ？

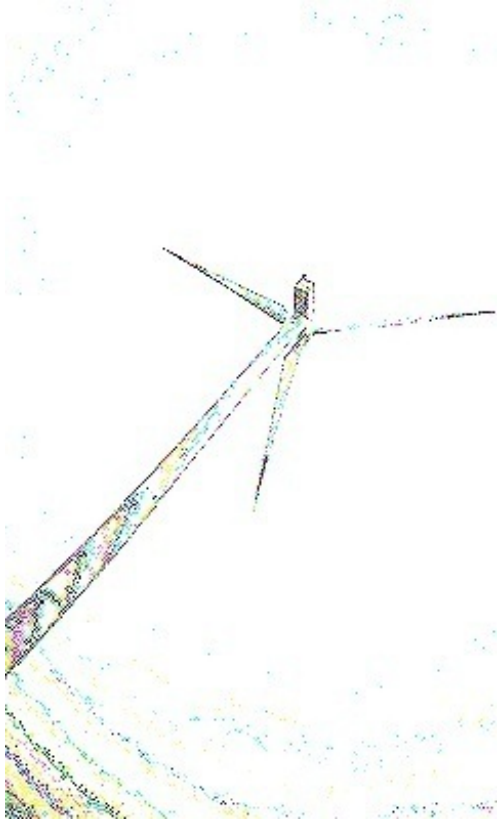
その後、この詩を聞いていた人が詩を書き始めたり、朗読をし始めるかもしれない
そして、その人の書いた詩が高く広く評価されるようになって、遠い国にまで渡って翻訳されて

また、違う誰かが独りでもその姿を見て
こんなのも詩として発表していいんだ
こんな程度でも詩人として成立するんだって

そう思ってくれないとは限らないでしょ？
絶対に起こりえないとは言いきれないでしょ？ 0%とは限らないでしょ？

まったくの孤独のワンルームの独り言であろうとも いつかに連なっている ちゃんと
まったくの孤独のワンルームのこの瞬間であろうとも どこかに連なっている ちゃんと

鳴り止まぬ潮騒



絶望のない

暗い 暗い 海を泳いでいる

起きたときには

そうになっていた そう鳴っていた

フライドポテトを食べた直後の

人差し指と親指にまとわりついた

まどろんだ違和感のようなものが

断続的に

拙速気味に

心象風景を占領してゆく

責任なき自由か

自由なき責任か

無理矢理

絞り込まれる選択肢の数々

文化が

涵養とも狂気とも程遠い悲鳴を伴い

絶望から

高速で転がってゆくのを半笑いで見送る

政治が

熟議とも独裁とも程遠い嘆息を伴い

断崖から

光速で転がってゆくのを半笑いで手拍子

ありとあらゆる決断を否定し

ありとあらゆる延期を肯定する

舐めきった安静で

冷めきった瞳孔で

暗い 暗い

いつかのような波に吞まれてゆく

ピラミッドの落書き



どうせこんなもんだろ？
なんて姿勢はしてこなかった
我武者羅に
ただひたすらに
目の前の一つ一つと向き合ってきた

どうせこんなもんだろ？
なんて台詞は発してこなかった
無我夢中に
ただ真っ直ぐに
目の前の一つ一つをやりきってきた

心の奥底では
「どうせこんなもんだろ？」が
終始渦巻いていた
誰にもいえないまま
何にもぶつけられないまま

心の奥底では
「どうせこんなもんだろ？」が

終始渦巻き続けていた
誰にも愚痴れないまま
何にも零しきれないまま

ただただ
何でも真面目にやりますよ的なスタンス
ただただ
何でも真面目にやりますよ的なスタンス
脱ぎ方を忘れてしまっていた

ばかり器用に身に着けていった

ばかり器用に身に着けていくうちに

気づいたときには
どこにも辿りつけていかなかった
気づいたときには
いつかも越えられていかなかった

わざわざ気づくまでもなく
どこにも
行けない気は何となくしていた
わざわざ気づくまでもなく
いつかを
越えられない気は何となくしていた

どうしようもない現状に
心の奥底で 嫌気ばかり刺している
刺したところで
何一つとして代わり映えしないとしても
刺さずにはいられない
刺さずにはいられない
表立ってはまさかできるはずもなく

足りないとか
満たされないとか そんな単純じゃない
原因は
抽象を極めて幻想的ですからある

足りないとか
満たされないとか そんな単純じゃない

目くるめくように深まっていく
誰のせいでも
何のせいでもない
その事実がこの胸を締めつけすぎる

抜けきったところで決して拭えやしない
繰り返したところで決して拭えやしない
予感確信に近づく
予感確信に靡く

抜けきったところで決して拭えやしない
繰り返したところで決して拭えやしない
予感確信に迫る
予感確信に染まる

「どうすればいいんだ？」って
台詞自体が
あまりにもインスタント化されすぎている

「どうしようもない」って
台詞自体が
あまりにもバーゲンセールされすぎている

「どこにいけばいい？」って
台詞自体が
あまりにもフレーズ化されすぎている

「どこにもいけない」って
台詞自体が
あまりにもメロディー化されすぎている

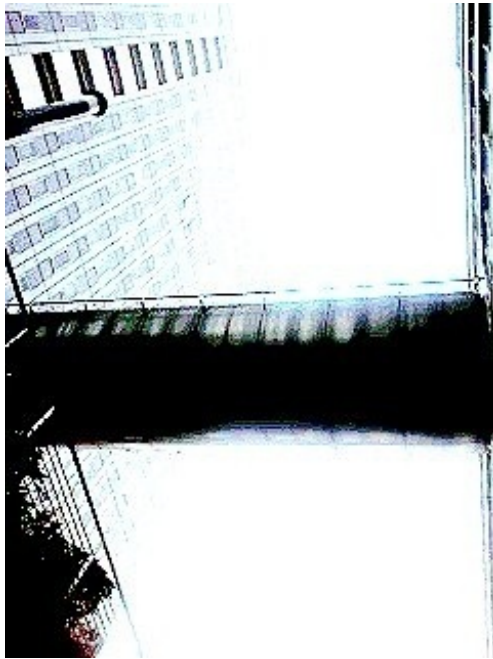
「いつに戻ればいい？」って
台詞自体が
あまりにもコピペされすぎている

「いつにも戻れない」って
台詞自体が
あまりにも普遍化され過ぎている

追い越しても、追い越しても
追い越しても、追い抜かれていく
追い越しても、追い越しても
追い越しても、終わりが見えない
追い越しても、追い越しても
追い越しても、ちっとも変わらない
追い越しても、追い越しても
追い越しても、少しも立ち止まれない

「どうすればいいんだ？」って
「どうしようもない」って
「どこにいけばいい？」って
「どこにもいけない」って
「いつに戻ればいい？」って
「いつにも戻れない」って
台詞に代わる
適切な台詞が見当たらないまま
適切な生き方を見出せないまま

二十五歳のお盆



予定通りに終わった記憶がない夏休み
小学三年の夏休みの
スケジュール表が物語っている

「キタナイ字！」と
左隣からずっと覗き込んだつぶらな姪っ子
「わたしはもう宿題おわったよ」と
誇らしげに言い逃げ

久しぶりの帰省
出来たてのショッピングセンターちらほら
懐かしい匂いの実家
荒々しさが全くと言っていいほど
なくなった隣家の暴犬
相変わらずの両親
それなりに幸せそうな姉夫婦
天国を
先取りしたようなターコイズブルーの空

切なさだけで
懐かしさだけで
どこまでも行こうと思えば
行けないことはないのだろう

マンネリを誤魔化しながらなら

ちょっとの

ひたむきさと優しさがあれば

大きなトラブルがあっても

生きていけるのだろう

災害と病気をのぞけば

経験が増えて

風景が変わって

価値観も少しずつしななってゆく

両親、姉夫婦、同級生の近況を

聞いていくうちに

また

新たな発見が生まれたり

疑問が渦巻いたり

「ボクはボクを見つけない。

どんな風になるとしても

理想的なボクになりたい」

的外れな

哲学もどきな

暑苦しい字で書き殴った卒業文集の裏表紙

二度と取り戻せないあの頃

急速に

甘酸っぱい

ポジティブなフラッシュバック

そうこうしているうちに

ケータイのアラームが鳴り響いて

慌てて

ポストンバッグに

文集や思い出のノートをつめて部屋を出る

「またな」と
つぶらな姪っ子の頭をポンポンと叩いて
「お正月には帰ってきなさいよ」と
儀礼めいた母の言葉を背に受けながら
新幹線出発の
二十分前到着をイメージして駅へと歩く

真夏の陽射しに促されるように
揺れる陽炎が
帰るべき
明後日のオフィスの
デスクをふと過ぎらせる

ちょっと鬱陶しい
だけど嬉しい
お土産として渡された清涼飲料水
ゴクッと飲んで
歩くペースを上げた 八月末



綺麗だね
言うまでもなく
その輪郭は
どこから見ても隙一つない

可愛いね
言うまでもなく
そのつぶらな瞳は
いつ見ても弾けている

悔しいね
焦がれても焦がれても
焦がれてしまうことが
悔しいね
毎日のように会っているのに
飽きることもないのが

切ないね
惹かれても惹かれても
惹かれてしまうことが
切ないね
毎日のように会っているのに
日々ハッとしてしまうのが

どんな気分なんだろう
もし君と同じ立場になれていたらって
考えると嫌になるよ

ただ歩くだけで芸術的さ
雑踏ですれ違う人々の視線が
はっきりと吸い寄せられていくのを感じる
隣で
それを感じながら
自分のことじゃないのにドギマギ

ただ頬杖するだけで隔世的さ
図書館で通り過ぎる人々の視線が
はっきりと吸い寄せられていくのを感じる
隣で
それを感じながら
自分のことじゃないのにドキドキ

どこにいてもこんな風なんだろうね
君って存在は

いつからって聞いたら
「よく覚えていない」って
興味なさそうな返答

気になって疲れたりしないって聞いたら
「慣れちゃってるから」って
どうってことなさそうな返答

どうなっているんだろうって
思わずにはいられない存在感
それに見合うように
気さくで程よく毒っ気のあるクレバー

どうなっているんだろうって
思わずはられない存在感
それに相応しいように
アクティブで突拍子のない
多面的実践主義者

綺麗だよ
言ったところで嬉しそうに
微笑むことなんて皆無だろうけど
その輪郭はどこから見ても隙一つない

可愛いね
言ったところで
ちょっと照れることなんて皆無だろうけど
そのつぶらな瞳は
いつ見ても弾けているんだ

綺麗が増していく
日々、一瞬一瞬
可愛さが色づいていく
日々、一瞬一瞬

どこまで綺麗になるんだろう
君って存在感は
どこまで可愛くなるんだろう
君って存在感は

恋人でも友達でもなくていいから
程よい距離感で
それを見届け続けたいと思っているのは
僕だけじゃないはず

って言ったら
そうかもねって表情で
「お世辞でもありがとう」だって

ああ、悔しいな

ああ、切ないな

ああ、嬉しいな

隊列葬列



隠し続けてきた快樂の芽
浮かんでは消える数百対の美辞麗句
云うべき空は
逃げるべき海は いつの時代も予告なし

過去と今
今と未来
明確に
区分できるはずのない大地に
意図もおぼろげなまま文明を流し込む
「大丈夫、大丈夫」と
「みんなやってるから」と
科学信仰自ら
科学的根拠を
浅く見積もり逃げ切りを図る

広がる
我々の世代では
到底片づけられないことを知りながら
広げる
我々の世代では
到底片づけられないことを前提にしながら

隊列のように

浮かばれない先祖たちがデモ行進

葬列のように

満たされない祖先たちがシュプレヒコール

その予感が反射するのを

その反響が滞留するのを

イメージーションを

吊るし上げて「非在」とする

なあに

今に始まったことじゃない

なあに

今だけで終わる話でもない

知らずに済んだフクシマ

ミリシーベルト、ミリシーベルト、ミリシ・・・
一生、知るはずのなかった言葉
ベクレル、ベクレル、ベクレル、ベクレル・・・
一生、知らずに済んだはずの言葉
一大キャンペーンのように
バラ撒かれた
バラ撒かれた
津々浦々にバラ撒かれた

無知は黙認に等しく
無関心と何ら変わらないこと
痛切に実感した
福島がフクシマになってしまってようやく

数値に求められ
毒気を抜かれたリスクとコスト
一つの天秤に乗せられ
維持を前提とし
見え透いた古典原能を誇大踏襲

「今、福島原発はどうなってるの？」
夕方のニュースを見ながら
上の空で答えながら、ふと気づく
「よくわからない・・・」
いつの間にか
あんなに溢れていた関心が薄れている
あれから
まだ5ヶ月しか経っていない蝉時雨

しわ寄せは民に向かう
大誤算は最下層が被る
根本的な歪みが
少しでも露わになればあまりにも脆い
「文明」とはもはや呼べぬ文明

責任はなすりつけ合いの道具
いつからかそれが当たり前となり
原因は入り組みすぎて
解明は将来世代にまで持ち越し

世界平和を願いつつ
自国さえよければ闊歩
余裕がある時は 自然と上から施し目線
余裕がなくなれば 堂々と「構ってられるか！」宣言

地球は回る
あきらめることなく

地球は回る
期待することもなく

行き場を失くした民は
怒りを持って余した民は
大きな 大きな 広場へと向かう

この世界のおかしさを分かち合うため
この世界の貧しさを改善するため

利口ぶった

政治と経済の肩を叩くんだ

「もっとマシな方法があるはずだろ？」と

何才からでも研修中

胸に【研修中】の札

「いらっしゃいませ」と、深々としたお辞儀

ゆっくりと

「一点、二点・・・」

声に出しながら

ミスのないように丁寧に

傍らには先輩社員

さり気なく袋詰めのサポート

列に並ぶお客のあたたかな眼差しの中で

店内アナウンスは方言全開

「一人暮らしを始めてすぐにアルバイトを始めました」

そう言わんばかりに

何にも染まっていないイントネーション

商品の陳列はテキパキ

商品の質問をされるとドギマギ

迷ったり、焦ったり

泣いたり、笑ったり、行ったり来たり

何才でも研修中

何才からでも研修中

時にハラハラさせる初々しさ

段々と目を見張るほどのなめらかさ

その過程はただただ美しい

過去の

未来の

現在の

自分のような

あなたを見かけるたび

心の中で （ がんばれ！ ） と応援

糖分当分ゼロ。



海を 静かに 渡ろうとして
やっぱり 怖くて 恥ずかしくて 止めにして

そんなこと 繰り返して
繰り返してはならない 季節になっても 繰り返して、繰り返して

生きるか、死ぬか
毎時、毎分、毎秒 駆け巡る 自問自答 甘ったるい ってもんじゃない

山を 和やかに 登ろうとして
やっぱり 怖くて めんどくさくて 止めにして

そんなこと 繰り返して
繰り返してはならない 漆黒になって 執行延長の申請を繰り返して

色がなくなってから
どれくらいの時が経つだろう
朝、目覚めてみれば 色が 全くないんだ

音がなくなってから
どれくらいの時が経つだろう
朝、目覚めてみても 音が 全くないんだ

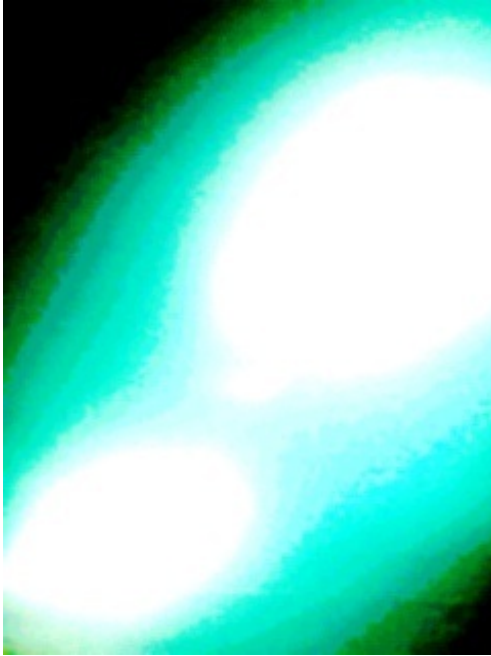
現実のようで 現実じゃない 現在進行
進んでいる感触なんて
行っている手応えなんて 皆無 生まれてこの方、皆無

海を 静かに 渡ろうとして
やっぱり 怖くて 恥ずかしくて 止めにして

山を 和やかに 登ろうとして
やっぱり 怖くて めんどくさくて 止めにして

生きるか、死ぬか
毎時、毎分、毎秒 駆け巡る 自問自答

甘ったるい
けれど、糖分が足りない



何もなくても光が
降り注いでいた日々を思い返す
傍らでいつも咲いていた笑顔
徐々に枯らしてしまっていることにも気づかなかった

1人きりの道
背を少し丸め歩いていく

すれ違う家族連れ
ささやかな優しさ すべてあげる

すれ違うカップル
僕の方も 未来を 楽しんでくれ

夜がやってくると
寒くもないのに震えてしまう
朝がやってくると
予定もないのに慌ててしまう

選んだ孤独に包まれ
選んでくれた孤独を抱きしめる

この詩を求める誰か
遠い未来にいるはずの誰かへ
この詩を求めた何か
遠い過去にあるはずの何かへ

時代がめまぐるしく
色を変えていく中で
瞬きをすることにも疲れて

環境が狂おしく
音を変えていく中で
五感を開くことにも疲れて

世界よ、ありがとう
感謝しきれないのを承知で感謝したい

人生よ、ありがとう
報恩しきれないのを承知で報恩したい

せめて、詩を書くことを通じて

傍らでいつも咲いていた笑顔
枯らしてしまつて ホントごめん

傍らでいつも咲いてくれた笑顔
どうか どうか 幸せになつていて

1人きりの道

背を少し丸め歩いていく

すれ違う同年代

微かに残る この情熱を託す

すれ違う老若男女

幸、多からんことを祈るよ

鏡の前で座り込んだ

遠い未来にいるはずの少女へ

雑踏で空を見上げた

遠い過去にいたはずの少年へ

今、この詩を贈る 届かないとしても

今、この詩を贈る 響かないとしても

何もないけど

この今にも光は降り注いでいるのかな

いつかこの今を振り返れば「光に溢れていた」と思うのかな

風にゆれる季節

愛に溢れる街角

月が照らす公園

夢が芽吹く駅前

当たり前だったすべてが やけに美しく見える

なつかしい香りを背に

あたらしい風景を胸に

1人きりの道

背を少し丸め歩いていく

1人だけの道

背を少し丸め歩いていく



忘れることはない。
毎年、この日が近づくと必ず思い出す。

忘れることはない。
忘れても、忘れても、思い出す。
忘れても、忘れても、思い出さざるを得ない。

毎年、毎年、これからもずっとそうだろう。
何をしていたのか、あの日。
どこで何をしていたのか、あの日。

一人一人が思い出す。
何をしてきたのか、あの日から。
どこで何をしてきたのか、あの日から。

一人一人が振り返る。
この日が近づいてくるたびに

忘れていたことを思い出したり
忘れてはならないと、誓いを新たにする。
それは調子のいい話でもある。

だけど
私たちはすべてを覚えておくことはできないから
調子のいい話でも
世界は一つであるかのように
世界は一体であるかのように
毎年、この日を迎えていく。

どんなに忘れないようにしても少しずつ忘れていくから。
どんなに覚えていても
都合の悪いことは忘れ、都合のいいことばかり覚えていくから。

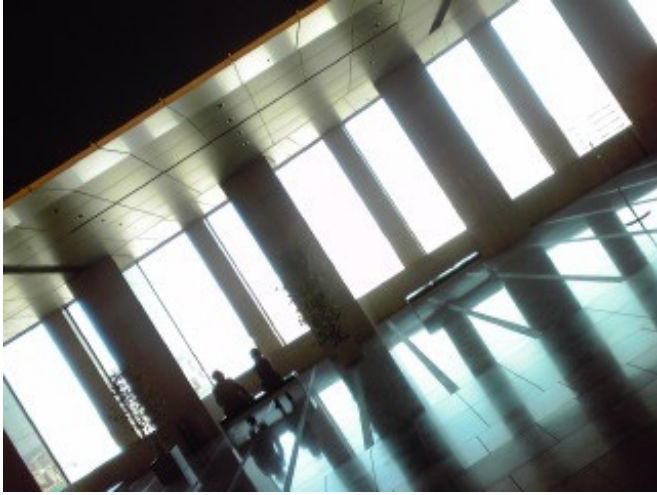
あの日を
過度な悲観に染めきった記憶にしないためにも。
あの日を
過度な楽観に染めきった教訓にしないためにも。

忘れてはならないことを徐々に忘れていく私たちは
忘れても構わないことをずっと覚えていてしまう私たちは
この日が来るたびに思い出す。この日が来るたびに語り合う。

調子のいい話ではあるが
そうやって私たちは
忘れてはならないことと
覚えておかなくてもいいことを振り分けていく。

生きていくために。
生かしていくために。
活かし続けていくために。
忘れても、忘れても、忘れても、忘れないために。

Morning Moment



詩？

「興味ない」

まあまあ、そう言わずに。

流し読み感覚で。

はじまりの朝だ。

もう、夕暮れだとしても。

はじまろうとしているなら、それは朝だ。

はじまりの朝だ。

どんな暗闇だとしても。

はじめようとしているなら、これは朝だ。

あっという間。 見つめる間もない現在。

あっという間。 振り返る間もない過去。

あっという間。 思い描く間もない未来。

そう思い込みがちな自分の歩幅を大きくし

そう決め込みがちな自分の背筋を伸ばす。

朝だよ。

生活に生活に生活を重ねていく。

一瞬一瞬が

何らかのはじまりであり、何らかのおわり。

朝だね。

人生に人生に人生を重ねていく。

一瞬一瞬が

誰かのはじまりであり、誰かのおわり。

信じる。

まずは、そこから旅立つ。

もがく。

まずは、そこから実験に次ぐ実験。

ただ信じるだけだった過去に。

ただ眺めるだけだった現在に。

ただ描いていくだけだった未来に。

ゆっくりと

だけど

しっかりと

告別をしようと想える。

そんな朝だよ。

そんな朝が来るよ。

もう、夕暮れだとしても。

どんな暗闇だとしても。

はじまりの朝だ。 今日というこの日。

はじまりの朝だ。 今というこの瞬間。

信念片手に孤独を振り払う大統領

病院の窓から満月に目を細める高齢者

幸せと妥協をぐつぐつ煮込む夫婦

檻の向こうのゾウに恋心を寄せる豹
社会や常識の荒波を掻き分けるニート
海の青さに見惚れたままの入道雲
黙々と空き缶を拾い集めるホームレス
理想と倫理の狭間を羽ばたく科学者
可能性を胸に純粹と残酷を学ぶ子ども

それぞれにとっての朝。
はじまろうとしている。はじめようとしている。

それは、それは、ビューティフル・モーニング
これは、これは、ビューティフル・モーメント

詩？

「いまいちだった」
まあ、それならそれで。
ここまで読んでくれたことに感謝。

アンドロメダに向かってハンドキック

悲しみは拭えない

わざわざ拭おうとも思わない

一生分の悲しみを抱え込んだまま

何も、それは私に限ったことじゃない

虚しさは払えない

わざわざ払おうとも思わない

一生分の虚しさを背負い込んだまま

何も、それはあなたに限ったことじゃない

もう一度会えたら

もう一度話せたら

想い描かない日はない

もう二度と会えないのに

もう二度と話せないのに

想い描かない日はない

つまらない動機で

殺人なんかしてないで

つまらない大義で

戦争なんかしてないで

わかった顔して

簡単にスルーしないで

忙しそうな声して

簡単にフェードアウトしないで

その喜びに寄り添う詩を

その怒りに寄り添う詩を
その哀しみに寄り添う詩を
その楽しみに寄り添う詩を
なんとか書けるようにと

会えるのに、会いに行かなかった
話せるのに、話そうとしなかった
抱きしめれるのに、抱きしめなかった
分かち合えるのに、分けようとしなかった

最後の電話が
克明にこびりついたまま

現実には物語になりがちで
物語は感情に流されがちで
感情は感化に脆弱すぎて
自分で自分の輪郭さえ満足になぞれない

思春期から続く
漠然とした空白、空白、空白

また会いたい
また話したい
また抱きしめたい
また分かち合いたい

会ったこともないのに
話したこともないのに
抱きしめたこともないのに
分かち合ったこともないのに

その誰かを
その何かを
ありありと思い浮かべながら
幻想の湖畔に佇んだまま

誰に届けるでもない

何に捧げるでもない詩を

1 篇、2 篇、3 篇と

今夜も、アンドロメダに向かってハンドキック

つまらなさを嘆き
つまらなさに沈み
つまらなさを助長し
つくべき嘘をつかずに
つかなくてもいい嘘をつき
強がることに慣れ
つながることを恐れ
ついたて越しのよそよそしさで
つんつんとした殻を被り
つくづく心だけ幼いまま
つくづく体だけ老いながら
付け焼き刃な涙を添えて
つぶらないつかの瞳
艶やかないつかの仕草
つんざくようないつかの歡喜
つまびらかな追憶に
追憶を重ね重ね
付かず離れずな陰影くっきり
追従する受け身を引き摺りながら
追悼するような謙虚を忘却したまま
月夜に
つまらなき

つぶやき繰り返す。

つまり

尽きぬ溜め息については

ツキがないとアルコール片手に

つんとする鼻先をすすってばかり。

走りゆく鏡

走り始めた

向かい風さえも、今は心地いい

走り始めた

追い風に押され、心は晴れやかに

0から

1つ1つ

たしかな熱とともに

すべてが真っ白なまま

始まりを待ちわびている

走る意味に

囚われるのではなく

走る煌きに

まっすぐに染まっていく 高揚を選び取る

夢のような 道のりなのだとしても

幻のような 歩みなのだとしても

この今は

その今は

「何か」を夢見ている

「誰か」へと届けようとしている

走る心を見て

勇気づけられること あまた

走る鏡を見て
思い起こさせられること あまた

朝が今日も
昨日とは違う朝が
走ってゆくすべての心を やさしく 包み込んでゆく

朝が今日も
明日とは違う朝が
走ってゆくすべての鏡を やさしく 抱きしめてゆく

果てなき荒野に吹く向かい風
全身で受け止めて

深い深い森を駆け抜ける追い風
五感で感じ抜いて

漫画みたいに
ドラマみたいに
映画みたいに
小説みたいに
芸術であるかのように 無理することなく乱反射

漠然とした倦怠感。

終わりゆく夕陽を見つめ

今日を悔いながら

眩しかった昨日を懐かしむ。

少し深い方をみれば

生き生きと今日を抱きしめている人々がいる。

絶望を囁んでいる場合じゃないと

奮い立たせてくれる。

漠然とした悲壮感。

走ってゆく列車を見つめ

今日を逃さぬように

つたない詩たちを解き放つ。

少し遠い方をみれば

必死に今日を駆け抜けている人々がいる。

諦めを貪っている場合じゃないと

思い起こさせてくれる。

一見

世界が幸せに満ちていても

まったく潤っていない人々がいることを忘れずに。

表層で

世界が輝きに満ちていても

まったく陽を浴びていない人々がいることを無視せずに。

ただ歩くだけでも

自然な笑顔がそこら中に溢れている

今日みたいな日は

描きながら

祈りながら

想いながら

孤独だけがもつ芸術を信じ

少しでも長く

少しでも遠く

少しでも深く浸透するように

彼は、試して作って羽ばたいていく。

大きな 黒い黒い 果てしない宇宙の風に押されながら。

彼女は試して作って潜っていく。

大きな 黒い黒い 果てしない宇宙の波に乗りながら。

時間を捨てる！

時間がない？

バカを言え。

時計を見るな！

時間がない？

バカを言え。

時計など捨てる！

あんたより時間がない中で

どうにかこうにかやり抜いている人が

何万人いることだろうか。

あんたより時間がない中で

なんとか工夫して乗り越えている人が

何億人いることだろうか。

時間がない？

世界で一番忙しい仕事についているわけでもないのに。

時間がない？

世界で一番忙しい創造を続けているわけでもないのに。

時間がない？

世界で一番忙しい立場で生きているわけでもないのに。

時間がない？

バカを言え。

時計を見るな！

時間がない？

バカを言え。

時計など捨てろ！

あんたより忙しい人は世界に何万人というよ。

俺より忙しい人は世界に何億人というよ。

マナー、人生と世界における虚無感に対して

歩いても歩いても見つからない。
だから、人生は続いていく。

探しても探してもわからない。
だから、人生には終わりがある。

繋いでも繋いでも変わらない。
だから、世界は続いていく。

あなたがいなくても大丈夫。
わたしがいなくても大丈夫。

あなたが いつ いなくなっても大丈夫。
わたしが いつ いなくなっても大丈夫。

あなたが 最後まで いなくても大丈夫。
わたしが 最後まで いなくても大丈夫。

あなたが 最初から いなかったとしても大丈夫。
わたしが 最初から いなかったとしても大丈夫。

その事実
侘しさや寂しさや虚しさを覚えることがある。
ごく自然なことだと思う。

だけど
それらの感覚を
抱き続けるのはエゴでしかない。

それらの感覚を
吐き出し続けたいなら

芸術にまで高めなければならない。

最低限のマナーよ、それがその人生における
最低限のマナーよ、それがこの世界における

忘れられない。

「無理して忘れようとしなくていい」

慰めるように

自分に言い聞かせる。

けれど、忘れない。

やっぱり忘れない。

忘れないことには

本当の意味で進むことはできない。

あまりにも大きな太陽だった。

あまりにも輝かしい太陽だった。

照らし出してくれた。

何気ないことまで、神々しく思えるほどに。

意図的じゃない。

無意識でもない。

自然な風に乗せて、果てしない感覚を呼び覚ましてくれた。

尽きない感謝。

溢れている、毎日のように。

尽きない後悔。

溢れてくる、今でも唐突に。

思い出しては切なくなる。

思い出しては嬉しくなる。

あの頃と、何一つ、変わっていないかのように。

忘れない。

忘れられない。

忘れない。

忘れられない。

「いつか、きっと忘れられる」

慰めるように

月光に歌い上げる。



分断された悲劇

繰り返す応酬

反射する憎悪の悪夢

報復の名のもとに祭り上げられる犠牲者

物言わぬ亡骸をいいことに

物言えぬ霊魂をいいことに

報復の根拠とされる犠牲者

同質同量の被害と苦痛を与えるべきだと

感情に流される集合的過激

繰り返しても

何も解決の道筋に寄与しない
意識しながらも
轟音と過激に流されて止まない

新たな報復が
新たな憎悪を引き出し
その憎悪がまた違う報復の引き金となる

個人的衝動を無理矢理でも束ねて
地域的連帯による報復に持ち込む暴論

集団的憤怒をいたずらに増幅させ
国家的連帯による報復に持ち込む暴論

歴史的背景という意地と意地の衝突でがんじがらめ
地理的背景という呪縛と呪縛の相克でがんじがらめ
宗教的背景という口実と口実の慟哭でがんじがらめ

経済に糸を引かれている自覚を薄め
軍事に傾斜していく安易

偏狭な愛に唆されている背景を見ず
軍事を研ぎ澄ます綱渡り

アンインストール オールミサイル

アンインストール オールマシンガン

アンインストール オールヘイト

アンインストール ハイパーナショナリズム

アンインストール ハイパーキャピタリズム

アンインストール ハイパーエゴイズム

唐突に

罪なき少年たちは誘拐されて殺された

その報復で、別の罪なき少年たちが殺された

何の落ち度のない少年たちは

憎悪と報復の根拠として軽々しく扱われた

その憎悪は

あの憎悪は

双方の憎悪は

ただの暴力でしかなかった

その報復は

あの報復は

双方の報復は

ただの暴力でしかなかった



なくなる

なくなる

いずれ

いなくなる

いなくなる

いずれ

ならば

悔いなく

悔いという悔いを焼べて
今という連続を燃やす

燃え	上がれ	才能
燃え	上がれ	努力
燃え	上がれ	思考

一ミリも残らぬように
一グラムも残らぬように

最後の最後に
最期の最期に
完全燃焼されているように

燃え	上がれ	経験
燃え	上がれ	想像

燃え 上がれ 思想

絶え間なく 絶え間なく 絶え間なく
果てしなく 果てしなく 果てしなく

燃え 上がれ 人生
燃え 上がれ 創造
燃え 上がれ 実存

潔く
眩しく
激しく
優しく
逞しく
美しく
芳しく
華々しく
清々しく
神々しく
切なく

泥臭く

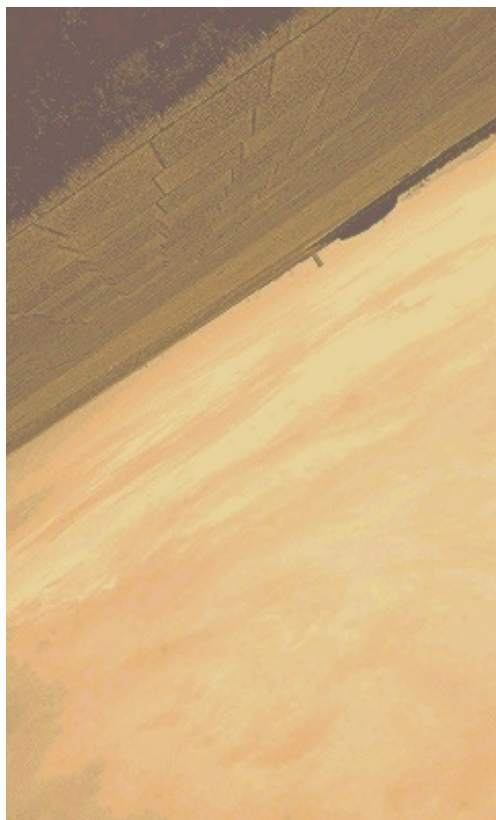
狂おしく

素晴らしく

柔らかく

柔らかく

柔らかく



保守派の彼女は言った。

「先の戦争は敗戦。

戦略や戦術が間違っていた」

リベラルの彼氏は言った。

「先の戦争は終戦。

そもそも戦争すること自体が間違っていた」

先の戦争は

戦いに負けたことを意味すると同時に

戦いが終わったことを意味している。

一度も

「終戦」という用語を使わなかった彼女は
先の戦争の是非
様々な戦争の是非には全く言及しなかった。
最後の最後まで戦略論や戦術論だけを滔々と述べた。

一度も

「敗戦」という用語を使わなかった彼氏は
先の戦争の戦略や戦術の是非
様々な戦争の戦略や戦術の是非には全く言及しなかった。
最後の最後まで外交論や平和論を滔々と述べた。

議論は平行線を辿るところか
ベルリンの壁のように絶対的な隔たりで
双方が独り言を延々と繰り返しているかのようで。

どちらの言い分にも
ある程度共感できる部分はあると思いつつ
議論とはとても呼べない乖離が気がかりだった。

「敗戦」という土俵
「終戦」という土俵
「戦略論」や「戦術論」という土俵
「外交論」や「平和論」という土俵が
交わるようで
肝心なところで交わっていかない。

完全に独立した土俵として

評価や価値が固定化して
歴史的観点の過剰分散と
各観点の超絶的な孤立が加速する縮図を見た気がした。

「先の戦争」と言いながら
共通土俵として語っているつもりが
全然交わらない主張を
全然交わらない評価を
全然交わらない価値を
それぞれの観点で
それぞれの箱庭で
ただ述べるだけに終始しているだけではなかったか。

眼前に相手がいるにも関わらず
自説に向かって自説を語り
持論に向かって持論を語り
聞き手なき状況をリフレインしてただけではなかったか。

絞り込むべき議論の土俵が
優先的に語り合うべき議論の土俵が
未だに定まっていない気がした、69回目の8月。

世代、時代、あっそう。

「世代が変わった」と

言われればそれまでだけど
何だかしっくりと来ません。
納得できません。

「時代が変わった」と

言えば説明がつくとでも？
誰かさんの受け売り
さもオリジナルであるかのように
述べるノベルはありゃしない。

壊れた。

と思っていたもの、まだ健在だったとの報。

崩れた。

と思っていたこと、まだ現役だったとの報。

思い通りにいかぬ人生

だからこそ面白い

と、割り切れるほど、未だ悟っておりません。

思い通りにいかぬ世界

だからこそ続けられる

と、分けられるほど、未だ片づいておりません。

いいねって思わないけど「いいね」

いいねって

思ってなくても

「いいね」を押したね。

いいねって

思ってなくても

「いいね」を押せるね。

嫌だねって

思ってたけど

「いいね」を押したね。

嫌だねって

思ってたけど

「いいね」を押せたね。

「いいね」を押しつつ

本音では「嫌だね」

「いいね」を押しつつ

本音では「イマイチだね」

「いいね」を押しつつ

本音では「ふつうだね」

「いいね」を押しつつ

本音では「どうでもいいね」

いいねって意味で

もう「いいね」を押しでないね。

純粹に

いいねって思って

最後に

「いいね」を押したのは
いつのことだろうね。

支持率が

支持率が

下がれば争点

ずらすのみ

届かないとしても、響かないとしても

届かないかもしれない

それでも、届けようとして止まない姿

あまりにも眩くて 言葉が追いつかない

すべてが叶うほど 世界は生ぬるくない

すべてが叶うほど 人生は甘ったるくない

響かないかもしれない

それでも、響かせようとして止まない瞳

あまりにも綺麗で 表現が追いつかない

すべてが叶わないほど 世界は肌寒い

すべてが叶わないほど 人生はほろ苦い

それでも想う 最期の最期までわからないと

それでも願う 最後の最後までわからないと

届くとしても

届かないとしても

この過程は残るだろう

この心の中に 間違いなく 時が止まるまで

響くとしても

響かないとしても

この道のりは残るだろう

その心の中に 間違いなく 時が止まるまで

すべて 抱きしめきれないのを承知で

すべて 抱きしめようとしてやまない

すべて 受け入れられないのを覚悟して

すべて 受け入れようとしてやまない

届け 届かなくても

届け 届かないとしても

響け 響かなくても

響け 響かないとしても

いつか またいつかで

どこか またどこかで

届け この言葉のすべて どうか、このすべて

響け この表現のすべて どうか、このすべて

同じ言葉で 同じ時間で 同じ場所から 届け いつかへ

同じ表現で 同じ世界で 同じ人生から 響け どこかへ

届け 届かなくても
届け 届かないとしても
届け 決して届かないとしても

響け 響かなくても
響け 響かないとしても
響け 決して響かないとしても

いない。

これ、いないな。

それ、う～ん、いないや。

あれ、まあ

いやあ、やっぱり

でも、いないか。

いない。

これ、もういない、いない。

いない。

それ、もういない、いない。

いない。

あれ、もういない、いない。

えっと、いない。

うん、いない。

ポイ！ポイ！

気持ちいい！

ポイ！ポイ！

清々しい！

ポイ！ポイ！ポイ！っと。

おっと。

いる、いる。

これだけはある。

危ない、危ない。

心はいる。

3本の矢を放ちました。

第1の矢を 放ちました。

大胆な金融政策でした。

金融を緩和しました。

異次元レベルで緩和しました。

円高を是正しました。

円安が進みました。

株高が進みました。

輸出の後押しにつながると思われました。

しかし

輸出は大して増えませんでした。

為替変動に左右されぬように

また少子高齢化による国内の労働者減少を考慮して

大企業中心に海外移転が既に進んでいました。

国内生産に切り替える流れにはなりませんでした。

だから輸出は大して増えませんでした。

円安を進めて

株高を維持して

輸出を増やして

収益を増やして

雇用を増やして

賃金を増やして

消費を増やして
収益を増やして
設備投資を増やしてという
青写真通りにはいきませんでした。

潤ったのは
輸出産業と大企業と株主でした。
輸入関連の企業や内需企業は
過度な円安による物価高で苦戦しました。

第2の矢を 放ちました。

機動的な財政政策でした。
国土強靱化基本計画のもと
公共事業を増やしました。

被災地の復興工事と
オリンピック関連工事が重なり
建築業界が人手不足になりました。
建築資材も高騰しました。

第3の矢を 放ちました。

民間投資を喚起する成長戦略でした。
規制・制度改革を進めようとなりました。
女性が輝く社会作りを進めようとなりました。
農業や医療分野の改革を進めようとなりました。

第1の矢

第2の矢に比べると

第3の矢の内容は

物足りない、期待外れという指摘もありました。

3本の矢によって雇用は増えました。

一方で非正規雇用も増えました。

賃金は大企業中心に増えました。

中小企業ではそんなに増えませんでした。

パートやアルバイトの時給は増えました。

円安による物価高で実質賃金は下がりました。

円高是正のはずの円安は
行き過ぎた円安で物価高を引き寄せ
消費税増税とのダブルパンチで
円安の恩恵を少なくしてしまいました。

金融緩和を異次元レベルまでしたのがまずかったのでしょうか。
黒田バズーカなど政府は日銀に頼りすぎたのでしょうか。

消費税の増税タイミングがまずかったのでしょうか。
増税に合わせた景気・反動対策がまずかったのでしょうか。

輸出増加の目算が甘すぎたのでしょうか。
輸出構造の変化を捉えられていなかったのでしょうか。

円安の進行予測が甘すぎたのでしょうか。

円安による物価高を甘く見すぎていたのでしょうか。

円安による物価高対策が足りなかったのでしょうか。

円安と株高で

企業収益と株主利益を増やして

雇用や賃金や消費の拡大につなげるという

トリクルダウンは甘い幻想だったのでしょうか。

金融緩和の出口戦略、

公共事業頼みの財政戦略、

インパクトに欠ける成長戦略など

もろもろの予測や対策が甘かったのでしょうか。

第1の矢は

まずまずだったのでしょうか？

いまいちだったのでしょうか。

修正が必要なのでしょうか。

第2の矢は

まずまずだったのでしょうか？

いまいちだったのでしょうか。

修正が必要なのでしょうか。

第3の矢は

まずまずだったのでしょうか？

いまいちだったのでしょうか。

修正が必要なのでしょうか。

平成は二十七年

西暦は2015年

立てても倒れる目標もあるだろう

描いても三日で飽きる目標もあるだろう

だけど気にせず

そんなの気にせず

立てればいい、景気よく

描けばいい、呑気に

さあ新年

どうだい青年

有言実行！

有言不実行！

不言実行！

不言不実行！

入り乱れ、咲き乱れ、未来へ

揺らいで、泳いで、仰いで

転んでも、擦り傷でも
天国でも、奈落の底でも
無風でも、凡庸でも

続いていくもの・こと
消えていくもの・こと
生まれてくるもの・こと

下手くそがなんだ
未経験がなんだ
くそったれがなんだ
なんもなくてもいいんだ
なんもないほうがいいんだ

タダだ
イマジネーションはタダだ
ダダだ
イマジネーションはダダだ

平成は二十七年

西暦は2015年

あなたのイヤー

俺のイヤー

あなたたちのイヤー

俺たちのイヤー

耳かっぽじって

五感研ぎ澄まして

すべてをフラットに受け取って

モザイクが追いつけないクオリティティで

モードが追いつけないクオンティティで

Ride on !

Go on !

Rock on !

車窓と街並から零れ溢れる綺麗

出逢い 別れ 過ち

取り戻せぬ決断 巻き戻せぬ選択

嘆くことが取り柄のような鳥たち

羽ばたくことを忘れて 陽光が照り返す水面を見つめる

車窓から零れていく

美しさを堪えきれずに

宇宙にまで届きそうな雲の切れ間

「綺麗・・・」

思わず

言葉を失くしそうな今

ゆっくりと 詩にしていく 日記を綴るように

季節 変わり目 潤い

思い出す広告 先進的な街並

笑うことが役目のような女子高生たち

時の早さを忘れて 色彩が飛び散る交差点を駆ける

歩道に溢れていく
狂おしさを抑えきれずに
地平まで切り開きそうな落ち葉の数々

「 綺麗 . . . 」

思わず
言葉を失くしそうな今
ゆっくりと 詩にしてい く 写真を撮るように

隣にいるのが現在であろうとも
隣にいるのが過去であろうとも
隣にいるのが未来であろうとも
手元に残るのが孤独であろうとも
ゆっくりと 詩にしてい く 車窓から、街並から、人生から

時間がかかっても焦らない
時代が変わっても気にしない

これが最後の詩になっても構わないと
これが最期の詩になっても悔いはないと
これが最高の詩になっていくようにと

そう想えるかどうか
そう願えるかどうか

一行一行 一作一作 書きながら
一行一行 一作一作 読み返ししながら
一行一行 一作一作 手繰り寄せてゆく

想いは枯れない
時間と共に色味を増して

願いは途切れない
時代と共に深みを増して

上手くいかないことも含めて
転んでばかりなことも含めて
落ちていくばかりなことも含めて
枯れていくばかりなことも含めて
かけがえのない煌めきとして楽しんでいける
欠かせないスパイスとしてやりがいを見出せる

どんなに闇でも
そこには光があると知っていた

どんなに負でも
そこには愛があると知っていた

不思議なくらい夢中
初めて触れた時のように今が連続していく不思議

ガラクタの中にも しっかりとカラフルを見つける
デタラメの中から しっかりとコスモスを見つめる

不思議なくらい新鮮

初めて知った時のように今が連続していく不思議

あなたのようなわたしの
わたしのようあなた
過去を変えていく

詩であることを核心的に
現在を駆けていく

詩であることを革新的に
未来を選んでいく

詩であることを確信的に

空が広がっていく

どこまでも 空間を超えて

海辺で見つめる その青を その深みを いつまでも

風が強く吹いていく

どこまでも 時間を超えて

砂浜で感じる その音を その匂いを いつまでも

3 3 3 万年前の後悔はもう繰り返さないから

3 3 3 億年後の決断をもっと後押しするから

3 3 3 兆光年先からの理想を抱きしめるから

あれはそれはこれはそうだと

あれはそれはこれはそうだと 【PV ポエムビデオ】

<https://www.youtube.com/watch?v=hvzZVM5ZZe4>

あれはあれとして
それはそれとして
これはこれとして
受け止めて
いくしかないだろう

あっちはあっちとして
そっちはそっちとして
こっちはこっちとして
捉えて
いくしかないだろう

あそこはあそことして
そこはそことして
ここはこことして
見て
いくしかないだろう

あの人はあの人として
その人はその人として
この人はこの人として
許して
いくしかないだろう

あの時はあの時として
その時はその時として
この時はこの時として
信じて
いくしかないだろう

あれはあれとして
それはそれとして
これはこれとして

あっちはあっちとして
そっちはそっちとして
こっちはこっちとして

あそこはあそことして
そこはそことして
ここはこことして

あの人はあの人として
その人はその人として
この人はこの人として

あの時はあの時として
その時はその時として
この時はこの時として

受け止めて
捉えて
見て
許して
信じて
いくしかないだろう

そうだろう
そうだろ？

死ぬ時が来たとして
痛みを抱えているのか
苦しみを抱えているのか
その時の自分はどんな感覚なのだろうか

想像しても
想像しきれない
死ぬ時の体調、心象、環境、諸々
読み切れない未来のその瞬間

時に思い浮かべ

時に想い掬い取る

死ぬ時の その時の 想いを 漠然と 厳然と

ついて回る
油断するとちらつく
どこからともなく漂ってくる

死の匂い、死の色彩、死の陰影

死ぬ時が来たとして

駆け巡るのだろうか 走馬灯

人生を振り返る時間はあるのだろうか

人生を振り返る心境は残されているのだろうか

人生を振り返る余裕は許されているのだろうか

考えても 考えても その時まで わかりはしない

抗うように 遠ざけることもある この死よ

避けるように 塞ぎ通すこともある この死よ

書きながら向き合っていく

詩を書きながら死と向き合っていく

どんな内容の詩であっても

そこには少なからず死のエッセンスやスパイスが滲む

死ぬ時が来たとして

この詩を書いたことも思い出すのだろうか

この詩を書いていた時の感覚も思い出すのだろうか

その時

私は私をどう受け止めているのだろうか

私は私の人生をどう振り返っているのだろうか

考えても 考えても その時まで 答え合わせはできない

昨日のネガティブ

引き摺って無駄にする今日を
増やしたくない これ以上増やしたくない

明日のポジティブ

描きすぎて無駄にする今日を
増やしたくない これ以上増やしたくない

真っ白な今日を

思い出したい

もう一度思い出したい

誰のものでもない

何の為でもない

昨日や明日に明け渡さない

僕だけの今日がある

僕だけの今日を抱きしめる

僕だけの今日を生き抜いてみる

競争なんてやっている暇はない
内紛なんてやっている暇はない
戦争なんてやっている暇はない

今日にはない

今日という1日にそんな暇はない

昨日のネガティブに
振り回される今日はもうウンザリ

明日のポジティブに
振り回される今日はもうウンザリ

飛び立ってしまえばいい

羽ばたいてしまえばいい

昨日なんて忘れて 明日なんて忘れて
今日だけを信じて 今日だけを感じて

昨日のネガティブを軽減させるためにも
明日のポジティブを増幅させるためにも

今日は今日のネガティブだけを
今日は今日のポジティブだけを

そうは思っても
昨日のネガティブを振り返ってばかり

そうは思っても
明日のポジティブを思い描いてばかり

心ぐらい何とかしたい
自分の心ぐらい何とか飼い慣らしたい

かかってこい、桜がすべて散ろうと。

数えきれない夢の中から

数えきれほどの目標を定めて走る

人波から離れて努力に耽ることも

努力から逃げたくて人波にまぎれることも

しかしながら、どこにいてもちらつく努力

近道だと思っていたら回り道だったということ

回り道だと思っていたら近道だったということ

振り返るまでわからない

その失望 この感動 **ありとあらゆる感慨**

季節が変わろうとも 諦められない夢がある

時代が変わろうとも 捨て去れない目標がある

だから

今日も僕はこうして何かしら綴っているんだろう

今日も君はそうして何かしら作っているんだろう

繰り返すだけじゃ近づけない

なぞるだけじゃ成長も成功も遠いまま

自覚から芽生える自核が磨き上げていく愚直

少しずつ工夫を増して減らして溶かしてく

下手な芸術家よりも芸術家らしい粘り強さで繰り返す工夫

少しずつ試行を足して引いて混ぜ合わせる

下手な科学者よりも科学者らしい粘り強さで繰り返す試行

「いつかできっと」と思いながら

そのいつかが、今日の「今」であっても動じないように

そのいつかが、今日の「今」であっても構わないように

一瞬一瞬に一步一步を刻んで備えていく

「どこかできっと」と思いながら

そのどこかが、目の前の「ここ」であっても動じないように

そのどこかが、目の前の「ここ」であっても構わないように

一瞬一瞬に一行一行を刻んで備えていく

どこからでもかかってこいよ

あの日から描き続けている夢よ

こっちは準備万端さ

あのあなたにも届くようにと

僕は繰り返し綴っていく

ただの繰り返しじゃない繰り返しを研ぎ澄ます

いつからでもかかってこいよ

あの日から繋ぎ続けている目標よ

こっちは準備万端さ

あのあなたにも届くようにと

君は繰り返し作っていく

ただの繰り返しじゃない繰り返しを磨き上げる

桜が咲き始めても 慌てすぎなくていい

桜が咲き誇ろうと 嫉妬しなくていい

桜が散り始めても 気にしなくていい

桜がすべて散ろうと あきらめなくていい

夢が枯れることはない

確かな夢が灯となって照らし続ける道を歩み

僕は、繰り返し綴る僕を信じ抜いていける

無数の叶わなかった夢を見つめ

成長するとは限らないこと

神様の悪戯もあり得ること

成長だけが全てではないことを痛感しながら

目標が枯れることはない

確かな目標が目印となって照らし続ける未知を歩み

君は、繰り返し作る君を信じ抜いていける

無数の叶わなかった目標を見つめ

成功するとは限らないこと

確率の悪戯もあり得ること

成功するだけが全てではないことを実感しながら

燦々とした太陽からの慈悲を全身で噛みしめる道

散々な豪雨から学ぶ厳しさを全身で噛みしめる未知

綴る本能的な喜びを

繰り返し噛みしめながら

この一瞬一瞬を綴る時

僕は誰よりも 本当の僕であれるだろう

作る衝動的な楽しさを

繰り返し抱きしめながら

その一瞬一瞬を作る時

君は誰よりも 本音の君であれるだろう

一行 一行 紡ぎながら
なんとか こうして 続けている

という大袈裟（という予防線）

一作 一作 繋ぎながら
なんとか こうして 放っている

という誇大表現（という自主規制）

この連続に意味を
少しでも意味を 刻みたくて 刻みたくて

という大袈裟（という予防線）

この過程に意義を
少しでも意義を 色づけたくて 色づけたくて

という誇大表現（という自主規制）

振り返る時
どう思っているのだろう
振り返る時
どう考えているのだろう

という大袈裟（という予防線）

今は まだ わからない

今は まだ わからなくていい

という誇大表現（という自主規制）

一瞬 一瞬 紡ぎながら

なんとか こうして 続けていく

という大袈裟（という予防線）

一生 一生 繋ぎながら

なんとか こうして 放っていける

という誇大表現（という自主規制）

緩やかなグラデーション

水彩画のそれのような淡い 遠い グラデーション

段々畑のそれのような淡い 蒼い グラデーション

という大袈裟（という予防線）

もっと、もっと、滲んでいくように

もっと、もっと、煌めいていくように

もっと、もっと、華やいでいくように

という誇大表現（という自主規制）

確かな一行一行を手に

確かに一作一作を胸に

という大袈裟（という予防線）

この世界に彩色を

か細くても光を 何にも 誰にも 影響を与えなくても

という誇大表現（という自主規制）

確かな一瞬一瞬を心に

確かな一生一生を夢に

という大袈裟（という予防線）

この世界に旋律を

か細くても愛を 誰にも気づかれなくても 知られなくても

という誇大表現（という自主規制）

という大袈裟に満ちたこの詩（という予防線）

という誇大表現に満ちたこの詩（という自主規制）

という自尊心に満ちすぎているこの詩（という自己保身）

あとがき

これまで

[詩のブログ「橙に包まれた浅い青」](#)と同じくらい、
詩の投稿SNS「[現代詩フォーラム](#)」での活動に力を入れてきました。

詩作りに本格的に取り組む、
真剣に読解しようとする人々が集まる「現代詩フォーラム」での投稿は
適度な緊張感があると同時に、様々な気づきが得られる機会にもなっています。

そうした刺激的なサイトで投稿した作品の中から
3ポイント以上を頂いた39篇をまとめたのがこの詩集です。

現代詩フォーラムにおいて
ポイントやコメントをくださった皆さんがいなければ
生まれることのなかったコンセプト詩集。

現代詩フォーラムでお世話になっている皆さんに深く感謝申し上げます。
また、この詩集やブログを読んでもらったあなたにも改めて深い感謝を。

『3つ星ポエム ～Power Push 39 Poems～』

- (*) 1～11篇目と38篇目以外の詩は電子詩集として初公開。
- (*) 2009年3月～2015年3月までの投稿分から抽出。
- (*) 3ポイント以上の確認は2015年4月2日に実施。

現代詩フォーラム

「[komasen333](#)の投稿作品」

<http://po-m.com/forum/myframe.php?hid=6982>

komasen333の関連リンク

【 橙に包まれた浅い青 】

<http://komasen333.blog.jp/>

【 電子書籍 】

<http://p.booklog.jp/users/komasen333>

【 現代詩フォーラム 】

<http://po-m.com/forum/myframe.php?hid=6982>

【 無限な無心な無色なシャイニング・ブライトリー 】

<http://blog.livedoor.jp/sakowha333/>

【 なんちゃって自己啓発の詩想 ～ ポジティブ ポエトリー ポッシブル～ 】

<http://positivepoetrypossible.blog.jp/>

【 Life Love Laugh ～変わる心は恋のせいに 変わらぬ心は愛のおかげに 】

<http://lifelovelaugh.blog.jp/>

【 エンプティ エン エターニティ 】

<http://komasen333.hatenablog.com/>

【 photo photo photo 】

<http://photo3.blog.jp/>

【 禁カフェイン→脱カフェイン→減カフェインに下方修正 】

<http://nocoffee.blog.shinobi.jp/>

【 YouTube 】

<http://www.youtube.com/user/komasen333/videos>

【 SUZURI-オリジナルグッズ 】

<https://suzuri.jp/komasen333/products>

【 レポート・論文 】

http://www.happycampus.co.jp/docs/983431505701@hc05/?docs_num=&m=2&v=&t=&e=&__a=list_bar

【 Twitter 】

<https://twitter.com/komasen333>

【 note 】

<https://note.mu/komasen333>

【 VALU 】

<https://valu.is/komasen333>

【 Gridge 】

<https://gridge.com/komasen333>

3つ星ポエム ～Power Push 39 Poems～

<http://p.booklog.jp/book/91225>

著者 : komasen333

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/komasen333/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91225>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91225>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ